

研究方法としてのオートエスノグラフィー

－行為者の意図の記述の観点から－

横浜市立大学大学院 望月 雄介

Autoethnography as Research Method: In Terms of Description of Actor's Intentions

Mochizuki Yusuke

Graduate school of Yokohama City University

要旨

これまで経営学では主に、経営者や管理者の行為を観察し、それを因果的な変数間のシステムで捉えて分析し記述することで理論モデルを構築することが主要な研究方法として確立されてきた。

しかしながら、経営者や管理者は「なぜ、その行為を行うのか」といった、行為に先んじる行為の意図については十分に検討されてきたとは言えない。その結果、これまで行為者の行為については、その行為の根拠について示すことなく、目的合理的行為、すなわち線形で静的な行為の記述がなされてきた。このことから本論文では行為に先んじる意図をとらえた記述をすることで、経営者や管理者の複雑で動的な視点から記述することを試みる。その具体的な方法として、本論文では近年経営学において用いられてきているオートエスノグラフィーを用いてアプローチする。

キーワード

行為、意図、記述、オートエスノグラフィー

1. はじめに

これまで経営学は、経営者や管理者の行為を研究者が観察し、それを記述することで理論モデルを構築することが主要な研究方法であり、また、経営諸課題を因果的な変数間のシステムで捉え分析することで様々な解決方法を提示し、実務的側面からも貢献を果たし今日まで発展してきた (e. g., 小笠原,1971; 沼上,2000)。

一方で、実際における経営課題に対し経営者や管理者が「なぜ、その行為を行うのか」といった行為に先んじる行為の意図について十分に検討されているとは言えない状況となっている。しかしながら、行為に先んじる行為の意図について検討することにより、経営

者や管理者がなぜある行為(すなわち行為のゼロポイント)を行ったのかを明らかにすることができ、そしてそれは「因果関係に支配された変数間のシステム」(沼上,2000,p.3)のような線形で静的な記述とは異なる新たな点を提供できると考える(e.g.,高木,2021; Bastien, Foster, and Coraiola, 2021)。この意図を検討することにより、あたかも教科書通りに立案された計画が正しい手順に則り適切に実行され、そして行為のエッセンスのみを奇麗に切り出した経営者や管理者の行為が目的合理的に加工され解釈された記述ではなく、立案された計画が思い通りには進まず、時には実行さえもままならず、悩み、苦しみ、時に失敗も経験し迷走しながらまさしくそれは目的非合理的行為に見えるかもしれないが、それでも自らの志の実現に愚直に向かう実際の経営者や管理者のリアルな姿、つまり行為者の意図そのものを記述することができる。

そのため、本論文では、意図の記述の観点から当事者でしか記述することができない経営の行為の意図を複雑で動的な視点から記述していくことのできる研究方法として、詳しくは第4節で述べていくが、オートエスノグラフィーの有効性を明らかにしていく。本論文の構成として、まず次節では、行為に先んじる行為の意図の重要性を述べる。その上で第3節では、経営者や管理者の行為に先んじる行為の意図について、経営学説史を紐解くことで、いかに記述されてきたのかについて述べる。第4節では、先にも述べた通り、経営者の意図的行為を説明する研究方法としてのオートエスノグラフィーの有効性について考察する。

2. 行為に先んじる意図の重要性

17から18世紀のヨーロッパにおける社会学では、「社会」を学問的に考察する際に当該者の「行為」を対象にして研究がなされてきたが、これを方法論的に積極的に基礎付け、そして社会学の研究に強力な影響を及ぼす「行為の理論」としての示したのが Max Weber である(e.g., 富永,1965; 新明,1971; 澤田,1975)。

その Weber (1972) が記した『社会学の根本概念』では、行為、特に社会的行為を以下のように定義している。「社会的」行為は、単数或いは複数の行為者の考えている意味が他の人々の行動と関係をもち、その過程がこれに左右されるような行為を指す」(Weber,1972: p8)。すなわち、他者からもそれを理解できる形で行為がなされているときに、それを社会的行為として認めると Weber は考えている(e.g., 新明,1971; 小笠原,1971)。なぜなら、Weber は、行為すべてを研究対象とするのではなく、他者との関係のなかで意味をこめておこなわれる行動つまり社会的行為を対象とするわけだがそれは、観察者があつかえるのは、その行為を他者が理解できるかで考えるべきであり、そのためその他者が理解できる行為を社会的行為とし、研究対象としたのである¹(e.g., 鈴木,1988; 佐藤,2023)。

このことを本研究の関心にひきつけて考えると、観察者である研究者が、自身がそれを

¹ 社会的行為から意味を捉えようとした点から Weber はみずからの社会学を「理解社会学」と名付けた。

理解することにより、はじめて当該行為を記述することができ²、またそれは行為の意図を観察者が事後的に行為から解釈もしくは行為者から意図を聞き出すことで、記述することとなる。つまり、行為に先んじる意図の記述は、「観察者」の所属する社会の構造や関係によって成り立つ枠組みや因果の規則性から行為を理解し、その枠組みやその因果の規則性に従って記述することとなる。

しかしながら、このような経営者や管理者の行為に先んじる意図を、研究者は既存の研究方法で虚心坦懐に記述することができるのだろうか。「なぜ、その行為をおこなうのか」といった行為者の行為の意図、それは、壁に当たりながらも試行錯誤を繰り返し、それでも前へと進む原動力、時には原動力なるものがまさしく行為に先んじる意図そのものであり、それを如何に感情も含め行為者である経営者や管理者のありのままの記述は可能なのであろうか。これを如何にリアルに記述することができるかが重要であると考え。なぜなら、例えば、米国を代表するビックテック企業である Apple 社の共同創業者の Steve Jobs は、結果として Mac や iPod そして iPhone を生み出し、またかつて存在した iTunes といったプラットフォームも生み出した。未だ熱狂的な支持者も多い彼は、その功績だけをフォーカスすれば経営者として一時代を築いた非常に優れた人物であるように見えるが、死後出版された彼の伝記である『Steve Jobs』の中でも記載され、また世間に広く流布されているように Apple 社の共同創業者であるにも関わらず、自身がヘッドハントして雇ってきた人物と経営方針をめぐる対立から Apple 社から追い出されたことや、彼の独特の言動や経営スタイルなどから毀誉褒貶の多い人物であるとも言われ、全ての課題を解決できるスーパーヒーローとしての経営者ではなく、壁に当たり横道にそれつつもがき苦しみながらも Apple 社の「Think different」の CM に代表されるように自らの信念に従い、困難があろうとも前に進んでいく非常に泥臭く、人間臭い人物としての姿が思い浮かぶ。

また、日本を代表するアパレルブランドであるユニクロを展開するファーストリテイリング社の実質的な創業者である柳井正氏も自身の著書である『一勝九敗』の著書名に表されるように大学卒業後に当時のジャスコ（現イオン）に入社するものの 1 年で退職、また家業の小郡商事（現ファーストリテイリング）を継ぐものの、当時いた従業員のほとんどに辞められ、そしてユニクロに事業展開後もスポクロ・ファミクロの失敗、農業事業の進出と失敗と苦労の連続であり（e. g., 柳井,2006; 杉本,2024）、順風満帆とは程遠い、紆余曲折ありながらも覚悟をもって己の信念に従い突き進む姿そのものである。

このことから考えると、Steve Jobs や柳井正氏が行う実際の経営は、壁に当たり試行錯誤を繰り返し紆余曲折しながらも前に進んでいく複雑で動的な行為は、経営者や管理者の行為を因果の規則性から推論的に観察者である研究者が理解できる範囲で記述する線形で静的なものとは異なるものであると言える。

そのため、次節では、経営学においてこのような経営者や管理者の行為に先んじる行為

² 翻って感情的な行為などは、理解でき合理的な行為からの偏向として理解するとも Weber は述べている。

の意図の記述についてどのように研究がなされてきたのかを経営学説史を紐解くことで述べていく。

3. 経営学における記述の変化

経営学の初期において Taylor (1911)、Fayol (1916) そして Barnard (1938) は実務家として自社の経営課題を解決することを目的として解決策を生み出してきた。そして、自社以外の組織でも応用できるよう一般化し発展してきた。いわゆる経営学の理論化である。このことについて、中村・権 (1974) は次のように述べている。Fayol (1916) は、元々鉱山技師であり、若くして管理者となり、とくに 1888 年から 1918 年までの 30 年間、コマントリ・フルシャンボ・ドウガズヴィユという、当時のフランスの基幹産業の指おりの大企業取締役社長として経営の実務にたずさわり、そして彼は、そこでの経験をつうじて、『産業ならびに一般の管理』において、経営管理における管理の原理、原則を追い求めその機能を明らかにし、著書名に代表されるように一企業の課題ではなく、理論の一般化を行った。

その著書の中で Fayol は、これまでのような管理者の個人な経験だけにもとづいた管理方法では、新しい時代の要請は答えられないということ、企業の諸機能の中で管理機能はもっとも重要なものであり、それに対処するために管理教育をおこなうことが必要であると感じ、このような意図から彼を管理職能とは何か、そして管理職能が合理的に遂行されるのに必要な客観的な管理原則と管理方法を確立することが必要であり、そこではじめて管理教育の実施が可能となると考え、研究に向かわせると共に彼の実務経験で体得し、多くの、そして長い経験を通じてたどりついた「原理」、「原則」であり、日常繰り返された経験をしっかりと自分の目で把握、それが実証に結びつくように明確に提示しながらこの原理・原則を追い求めている (e. g., 権,1974; 高橋,2004)。

また、Taylor(1911)は、19世紀末に製鋼会社の工場に職人見習いとして入り、職人となり、職長となりさらに機械技師として、その実践的な経験からやがてテイラー・システムと呼ばれる「科学的管理法」(Scientific Management)を展開した。彼は、「組織的怠業」の原因となる従来の「成行管理」にかえて、作業の動作研究や時間研究によってあらかじめ設定された遂行されるべき仕事である課業を中心とした課業管理を提唱した。これが後に科学的管理法と呼ばれるものの柱をなすものである。

彼が管理の問題を研究するにいたった直接的な契機は、自らの体験によって得たものであり、それは使用者と労働者とのあいだの非協力的な関係をなんとかして改善しなければならぬというものであった。そこには、いかに労働者を働かせ儲けるのではなく、使用者＝管理者と労働者が共にそれぞれの責任・義務を果たし、両者共に反映すべきであると説くのである。それが管理を科学化し、生産能率は増進することで高賃金と低労務費・低コストが可能となり、労使協調による双方が反映することが可能になるという彼の意図が

そこにはあった³。

しかしながら、そののちに経営学は Mayo (1933)、Simon (1957) といった経営学の専門家が出現し、ホーソン実験や意思決定の科学に代表されるように組織を観察することで理論モデルを構築するようになった。例えば、ホーソン実験は、1924年に国立科学アカデミーの全国調査協議会によってハーバード大学の産業調査部教授であった Mayo を代表としてウエスタン・エレクトリック社のホーソン工場での一連の調査研究であり、その調査は①照明実験、②継電器組立実験、③面接計画、④バンク配線実験、から成り立っている。現在では、方法論などに問題があるとして批判されているが、最初の主要な社会科学の実験ともよばれている (e. g., 中村, 権, 1974; 大月, 高橋, 山口, 1997)。このホーソン実験は、大月・高橋・山口 (1997) によれば、能率の論理に基づく公式組織と感情の論理に基づく非公式組織が存在し、管理者には両者を調和させることが求められるといった人間関係論の出発点として経営学の教科書等で記述されるが、元々は工場内の「照度の強度と作業能率とのあいだの対応関係」(中村, 権, 1974, p.89) を見出そうとしたものであった。

ここでは、工場内つまり組織において「照度の強度と作業能率とのあいだの対応関係」といった目的に対して原因と結果が如何に生じるかを調べることで、ハーバード大学教授である Mayo のような観察者(理論専門家)の視点で、その因果関係を明らかにしていくといったものである。ここでは、理論専門家が生じる以前の Taylor や Fayol のような実務家が意図した行為を自ら行うことで自らも観察者となり、原理、原則を追い求めるという経営理論の一般化を行うといった点において異なるものである。つまり、観察者と実務家が分離した状態で観察を通じて因果関係を明らかにすることとなった。しかしながらこのことは、実務家の行為の意図性を説明し明らかにする点において事後的に観察者がアンケートやインタビューを通して行わざるをえなく、意図性をどこまで開示するかは実務家の腹の内に依存するとともに観察者が理解可能な範囲での記述に留まることになってしまう。

この観察者の観察・記述と実務家の意図について、次節ではこのような行為に先んじる意図を説明する研究方法としてのオートエスノグラフィーの有効性について議論を展開し

³ このことについて、三戸 (1997) は、「テイラー・システムを民間会社や兵器廠への導入実施は、労働組合に大きな反発を招き、科学的管理を法律によって禁止しようという運動までに及ぶのであった。そのために米国議会は、科学的管理特別委員会を持つことになり、Taylor は、1912年1月に4回にわたって科学的管理について説明し、質疑応答の供述を行うこととなった」と述べている。委員会で組合側は、科学的管理を導入することが労働者の非人間化・労働強化であると攻撃するが、それに対し Taylor は、科学的管理の本質は何かということではそれは精神革命であり、その精神革命とは、「経験から科学」そして、管理を科学し、生産能率を増進させ、高賃金と低労務費・低コストが可能となるといった労使双方の「心からなる兄弟のような協働」(労使協調による双方の反映)との二者であると述べており、ここに実務家としての彼の科学的管理の意図があったのである (e. g., 中村, 権, 1974; 大月, 高橋, 山口, 1997; 三戸, 1997)。

ていくこととする。

4. オートエスノグラフィーによる意図の記述

オートエスノグラフィー⁴は、「近年、社会学や心理学においても注目を集めつつある、研究者自身の経験をエスノグラフィーという質的研究の一つの形態」（沖潮, 2019,p151）とされている。また、オートエスノグラフィーは、自叙伝的記述を通して豊かで分厚い経験と重層的な意識のあり様を開示していく研究方法である（e. g., 花家,2012; 沖潮,2013）。また、高橋（2021）によれば、「書き手の経験を対象化するオートエスノグラフィーとして、研究者がその現象を当事者として体験し、その経験からアカデミックなテキスト（論文や研究書）として生産していく方法」であると述べている。さらに Ellis & Bochner (2000) は、「自分の身体感覚や思考や感情に注意を払い、物語として自分の経験を記述」するものであり、「個人の経験を用いることで、人はどのようにして文化的な規範や経験、実践を意味づけるのかについて洞察を提供し、意味づけに複雑な内部者としての説明を与え、なぜ、またどのようにある特定の経験が挑戦的で、重要で、更には変容的なものであるかを示す」ものとしてオートエスノグラフィーをとらえている。

このようにオートエスノグラフィーは、質的研究の中でも、研究者自身の経験に焦点を当て、その経験の重層的な意識のありよう、つまり経験を対象化し自らの言葉として開示しテキストとして記述していくものであるといえる。

一方で、オートエスノグラフィーに基づく研究は、伝統的な社会科学の立場からすれば客観性や一般化可能性の点で疑問が提示されている方法論でもあり、アンケートに代表される統計調査のみならず、一般的なインタビュー調査や観察調査と比較しても、調査手続きや発見事実の客観性に問題があると指摘がなされ、また、厳密な定義や用法の規程がないまま発展してきたこともあり、個人的な経験である出来事をただ叙述的かつ主観的に記述するオートエスノグラフィーは、厳密性(Rigorous)を重んじる従来の研究方法と異なることからその価値が受け入れられにくいとされる（e. g., 金井,1990; 花家,2012; 沖潮,2019; 水野,2020; 高橋,2021）。しかし、一人称としての自分の経験だからこそ記述できることがあり、インタビューや外部者には語られないものにアクセスする機会を得ること、そして行為から理解しえる範囲において回顧的に意図を見出す従来の研究方法とは異なるものであると考えられる。

つまり、オートエスノグラフィーは、書き手自身を研究対象とし、自分の主観的な経験をつまびらかに喜怒哀楽の感情や行為を表現しながら、その経験におけるその感情や行為の意図を記述することでそのプロセスを明らかにしていく研究方法であると言える。オートエスノグラフィーによって分析する意義は、当事者の行為の意図をダイナミックに記述

⁴ オートエスノグラフィー(autoethnography)は、識者により、オートエスノグラフィー、自己エスノグラフィー、セルフエスノグラフィーと様々な呼び名があるが、本論文ではオートエスノグラフィーとして記載する。

することで一人称つまり当事者でしか記述することのできない行為に先んじる意図（経営者や管理者の意図的行為）を明らかにしていくことにある。

例えば、起業の際、経営者には必ず何かしらの意志といった意図が存在する。それは、「ある商品やサービスによって社会をより良くしたい」、「起業することで社会に対し何かしらのインパクトを与えたい」、「社会や他者から名声を得たい」もしくは「お金を稼ぎたい」という経営者の内面から湧き出る微妙で複雑な心の動きによる意思つまり意図は一人称としての当事者でしか知りうることのできないものである。また、日々経営を営むなかでは様々な課題が発生し、解決するために判断する場面が数多く存在する。そこでは、客観的な判断とは別に経営者や管理者の意志を持った主観的な判断、つまり行為の意図が存在し、その行為者の主観的な意図は一人称としての当事者でしか知りうることのできないものである。

このことから考えると、経営者や管理者の当事者でしか知りうることのできない複雑で動的な行為に先んじる意図は、書き手自身を研究対象とし、自分の主観的な経験をつまびらかに喜怒哀楽の感情や行為を表現しながら、その経験におけるその感情や行為の意図を記述することのできる研究方法としてのオートエスノグラフィーを用いることで記述することが可能であると言える。

では、実際にオートエスノグラフィーでは、他の記述方法とは異なるどのような記述ができるのであろうか。このことについて例えば沖潮（2019）は、「いかに自分の経験を記述するかにかかっているといても過言でない。」とし、また質的研究方法のオートエスノグラフィーは、「人間の意図や動機付け、感情や行動に焦点をあてる」（Adams, Jones, and Ellis, 2015: 訳, p23）ことで、自らの経験を分厚く記述することを通して、その場面の行動や感情、思考、経験、関係そしてやりとりなど丁寧に自らの内面を動画のような物語として描き出す記述が可能となる（e. g., Adams, Jones, and Ellis, 2015; 沖潮, 2019）。それは、自らの物語を自ら意味づけること、つまり行為者自らの意図を記述できる。それは、観察者である研究者が因果の規則性から行為者の行為を理解し、その枠組みやその因果の規則性に従って記述する方法とは異なる記述ができると言える。

このことから、経営者や管理者の意図を記述するにおいて、オートエスノグラフィーに一つの可能性が存在すると考えられる。

5. おわりに

本論文では、経営者や管理者の「なぜ、その行為を行うのか」といった行為に先んじる行為の意図の記述の観点からオートエスノグラフィーの有効性について論じてきた。これは、これまで経営学が経営者や管理者の行為を観察し、それを因果的な変数間のシステムで捉え分析し記述することで理論モデルを構築してきた従来の研究方法とは異なる新たな視点である。

その上で、本論文では、行為に先んじる意図の重要性について、まず Weber(1972)の社会的行為を概説した。そのうえで、第3節では、主に Fayol(1916)や Taylor(1911)のような

経営の実務家から経営管理における管理の原理、原則を追い求めその機能を明らかにし、「産業ならびに一般の管理」の著書名に代表されるように一企業の課題ではなく、理論の一般化をおこなってきた時代と、Mayo (1933) や Simon(1957)に代表されるような観察者である理論専門家の視点から組織において目的に対し原因と結果が如何に生じるか調べ、その因果関係を明らかにし経営者や管理者の意図の記述の観点から観察者の理解可能な範囲での記述（社会的行為の記述）に変化していったことを論じた。そして、第 4 節では、オートエスノグラフィーの有効性について、行為に先んじる意図の記述の観点から論じた。

本論文の貢献としては、複雑で動的な行為に先んじる意図の記述の観点からこれまでと異なる研究方法としてのオートエスノグラフィーの有効性について論じた点にあると考える。一方で、本論文の課題として、理論的検討が中心となってしまったため、経営者や管理者が現実の行為における意図についてオートエスノグラフィーを用いて記述し、実際に行為の意図を記述することができなかった。この点において不十分と言わざるを得ない。そのため今後は、オートエスノグラフィーを用いて経営者としての行為の意図の記述を行うことで、研究方法としてのオートエスノグラフィーの有効性を明らかにするとともに課題としたい。

参考文献

- 遠藤雄一(2007)『CRM の戦略的意義と課題』北海学園大学経営論集, 5 (1) p37-46.
- 大月博司、高橋正泰、山口善昭著『経営学－理論と体系－第二版』同文館出版.
- 小笠原英司 (1971)『マックスウェーバーと近代組織論』明治大学大学院紀要 経営学篇 p101-109.
- 沖潮 (原田) 満里子 (2013)『対話的な自己エスノグラフィー語り合いを通じた新たな質的調査の試み』心理学研究第 12 号 p157-175.
- 沖潮 (原田) 満里子 (2019)「自己エスノグラフィー」(サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真美編『質的調査法マッピング』新曜社) p151-158.
- 金井壽宏 (1990)『エスノグラフィーにもとづく比較ケース分析－定性的研究方法への一視角－』組織科学 24 卷 1 号 p46-59.
- 澤田徹郎 (1975)『社会的行為論の体系化と概念化－社会的行為理論の概念図式－』中京大学教養論叢第 16 卷第 2 号 p63-97.
- 佐藤俊樹 (2023)『社会学の新地平－ウェーバーからルーマンへ』岩波書店.
- 杉本貴司 (2024)『ユニクロ』日本経済新聞出版.
- 鈴木正仁 (1988)『ウェーバーの社会学－現代社会への視角－』世界思想社.
- 新明正道 (1971)『マックス・ウェーバーの社会学における行為理論の意義』立正大学文学部論叢,39 p1-23.
- 高木俊雄 (2021)『表象としての組織』明治大学大学院経営学研究科 2021 年度博士請求論文.
- 高橋俊夫 (2004)『H.ファヨールの管理論』明治大学社会科学研究所紀要第 42 卷第 2 号

p309-347.

高橋勅徳 (2021) 『婚活戦略』中央経済社.

富永健一 (1965) 「社会学とヴェーバー」(大塚久雄編『マックス・ヴェーバー研究』) 東京大学出版会 p9-38.

中河伸俊 (1999) 『社会問題の社会学－構築主義アプローチの新展開－』世界思想社.

中村瑞穂、権泰吉編著 (1974) 『現代経営組織論』日本評論社.

沼上幹 (2000) 『行為の経営学－経営学における意図せざる結果の探求－』白桃書房.

花家彩子 (2012) 「演劇経験を教育的に評価するための研究方法としてのオートエスノグラフィーの可能性」学校教育学研究論集 第25号 p85-98.

水野英莉 (2020) 『ただ波に乗る Just Surf:サーフィンのエスノグラフィー』晃洋書房.

三戸公 (1997) 「科学的管理の現在－三つの科学的管理とその射程－」中京経営研究 p1-22.

柳井正 (2006) 『一勝九敗』新潮社.

Adams, T.E., Jones, S.T., Ellis, C., (2015) *Autoethnography understanding qualitative research*. Oxford University Press. (松澤和正・佐藤美保訳『オートエスノグラフィー 質的研究を再考し、表現するための実践ガイド』新曜社,2022).

Barnard, C.I. (1938) *The Functions of the Executives*, Harvard University Press. (山本安次郎, 田杉競, 飯野春樹 訳『新訳経営者の役割』ダイヤモンド社,1968).

Ellis, C., & Bochner, A. (2000) *Autoethnography, personal narrative, reflexivity*. In N.K. Denzin & Y. S. Lincoln (Eds.), *Handbook of qualitative research, 3rd ed.* Sage Publications. (平山満義監訳 大谷尚・伊藤勇訳『質的研究ハンドブック 3巻 質的研究資料の収集と解釈』北大路書房,2006 p129-164).

Fayol, H. (1916) *Administration Industrielle et Générale*. Bulletin de la Societe de l'Industrie Minerale. (山本安次郎訳『産業ならびに一般の管理』ダイヤモンド社,1985).

Isaacson, W. (2011) *STEVE JOBS: THE EXCLUSIVE BIOGRAPHY*. Little, Brown Book Group. (井口耕二訳『スティーブ・ジョブズ I&II』講談社,2011).

Mayo, E. (1933) *The Human Problems of an Industrial Civilization*. New York: Macmillan. (村本栄一訳『産業文明における人間問題』日本能率協会,1967).

Macleay, M., Stewart R, Clegg, Suddaby & Harvey (2021) *Historical Organization Studies: Bastien, F., Foster, W.M., Coraiola, M. Don't talk about history* p90-103.

Simon, H.A. (1957) *Administrative Behavior 2nd ed.*, New York: Macmillan. (松田武彦・高柳暁・二村敏子訳『経営行動』ダイヤモンド社,1965).

Taylor, F.W. (1911) *The Principles of Scientific Management*. New York: Harper & Row.

Weber, M. (1972) 『社会学の根本概念』岩波文庫.